

季刊わたぼうし

NO.76
'08冬

シリーズ

後石原幸守さんと語る I

今回の目次

※シリーズ・後石原幸守さんと語る I	2
・出席者 後石原 幸守氏 玉田 幸氏 宮田 琴江氏	
・主な話題 「後石原さんの生い立ち～」 「ちびっこボランティアスクール」 他	
※みんなの広場	
・「武元七尾市長との懇談会」を読んで 山本 光男	6
・「福祉日記7」区分判定について	8
・ぜんちゃんの自立生活体験レポート⑤⑥	9
・詩 真っ白な雪 出雲 裕治	11
・「ミナ・クル」の改修工事 “七尾市長との懇談会”その後	12
・「食べ物談話」食べ物さんありがとう 秋本 信子	13
・田鶴浜高校へ「季刊わたぼうし」を届ける	13
※マイ・ブックスルーム	
・夜回り先生	14
※川柳裏表紙・編集後記	14

車椅子
押す手は若き
ボランティア
宮田 比呂雪



この機関紙は障害のある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

シリーズ 後石原幸守さんと語る I

【開催までの経緯】

後石原さんとある講演会で出会いましたが、あまり二人で話をしたことがありませんでした。いつも「HSK季刊わたぼうし」を読んで意見を言ってくれているので、「障害者自立支援法」について語っていただこうと思い、対談を企画しました。なお、この企画は「さいこうえんの障害者生活支援センター」のご協力を得て行われました。

【目 的】

「障害者自立支援法」が施行後1年半経過し、障害者の地域での生活はどう変わったか？

【語る内容】

①生い立ちから現在までのあゆみ
②『出前！ ちびっ子ボランティアスクール（以下・「ちびボラ」）』（羽咋市社会福祉協議会は、子どもから大人までの一貫した福祉教育を推進している。その中の小学生の部）との出会い、小学校などへ行ってどのようなことを主に話しているか？ 話すときに気をつけていること、失敗談など。

③「障害者自立支援法」が1年半を経過して
(次号NO. 77に掲載予定)

※掲載の個人名は後石原さんの意向により、本人の許可をいただいています。

【日 時】2007年10月7日(日)14時～16時

【場 所】さいこうえんの

障害者生活支援センター（JR七尾駅前）

【出席者】

・社会福祉法人「石川県視覚障害者協会」理事

羽咋郡市視覚障害者協会会長

後石原 幸守（ごいしはら こうしゅ）氏

「羽咋市社会福祉協議会」ガイドヘルパー

玉田 幸（たまだ みゆき）氏

・「さいこうえんの障害者生活支援センター」施設長

宮田 琴江（みやた ことえ）氏

・「HSK季刊わたぼうし」編集者・企画

桶屋 善一（おけや ぜんいち）



後石原氏・桶屋



宮田施設長

桶屋：今日はお忙しい中「後石原さんと語る」にご参加いただき、ありがとうございます。

なお、私は言語障害がありますので、以後の質問は「生活支援センター」施設長の宮田さんに代読や通訳をお願いします。

桶屋（宮田）：「障害者自立支援法」の話に入る前に、後石原さんの幼い頃の生活や盲学校の頃のことなどをお話し下さい。

後石原：生い立ちから話すと、昭和28年4月3日に羽咋市^{みこはらまち}神子原町という山の中で生まれました。その時は地域の学校に通っていて、中学校2年の時に目を悪くしたのですが、石川県の方では治らないと言われました。東京の日赤で看護師をしていた叔母さんが「来れば」ということで東京へ行って治療していたのです。

通院していたときの先生から「もう見えなくなるだろうから、盲学校へ入ったらどうですか?」と言われ、盲学校へ。

最初は「都立葛飾盲学校」の中等部に1年間、卒業して高等部は「都立文京盲学校」に入り、今行っているマッサージ・針灸の資格を取ってという経緯です。卒業後は「世田谷中央病院」でマッサージ、針をやり、いろいろ勉強して石川県へ帰って来たのは23才の時でした。嫁さんも連れて来ました。

羽咋で針灸・マッサージ師として開業していましたが、28才のときに「公立羽咋病院」に就職しました。

小学校6年生まで羽咋の山に住んでいました。盲学校はイヤでイヤでしょうがなかったけれど、今思えばよかったことは、生活訓練を受けたことです。盲学校の寄宿舎に入ったら、洗濯・掃除・料理などの家事を全部させられるのです。自然と、学校で勉強しながら、日常生活の一通りのことはできるようになったのです。「世田谷中央病院」に入ったときは、アパート暮らしをしていたのですが、そのときも家事全般はできました。

料理も細かいことはできなかったけれど、お惣菜は自分で作っていましたよ。だから盲学校の思い出とすれば、自然とそういう生活指導を受けていたので「良かったな」と思います。今思えばね……。その他はこちらでは考えられないくらいボランティアしてくれる学生がたくさんいたので、ハイキングに一緒に行ったり、参考書の音訳をしてもらったり、生活は充実していました。まあ最初の2～3年は嫌だったけれど、いろいろなことが出来始めたので、楽しかったです。だんだん目が悪くなってとき、精神的にもおかしくなって、自分との格闘はありましたよ。

今は妻が病気になっても、楽勝ですよ。自

分一人でいくらでも掃除、洗濯とか、買い物も自分で行って好きなものを食べるから、1週間や10日ぐらひはそんなに困ることはありませんね、障害を持ってつらい話というのは、みんな一緒だもんね。そんなもんで良いですか?



桶屋 : はい。

桶屋 (宮田) : 「ちびボラ」との出会いについて話して下さい。小学校などへ行ってどんなことを主に話しているのですか? 話すとき気をつけていること、失敗談など。

後石原 : それは「羽咋市社会福祉協議会」に「ボランティアセンター」が平成7年にできたとき、運営委員長だったのが嶋田さんという方でした。その人は「ボランティアセンター」に関わる以前に障害を持っている人たちと出会っていたのです。

嶋田さんは「音訳ボランティア」をし、手話サークルにも入っていたからです。また、地域の学校の先生との出会いもあり、ろうあ者の方と一緒に学校へ入っていました。

「ボランティアセンター」ができる以前のことです。その関係で「ボランティアセンター」ができたとき、「社会福祉協議会」職員の菊澤さんが障害別で目の見えない人とか、耳の聞こえない人とか、車いす利用者の人とかにお話を聞き交流するという企画をしたのです。その当時学校に総合学習という時間があり、人権教育ということで学校から依頼がありました。それが「ちびボラ」の始まった経緯です。

私も運営委員会で企画委員をしていたので、私と「ちびボラ」の出会いというのは、こういうことだったのです。一昨年は年間40回ぐ

らい実施されています。小学校は7～8校廻ります。

昨年は小学校の統合もあり、6～7校に30回ぐらいかなあ？ 視覚障害者とボランティア、聴覚障害者・手話通訳者とボランティア、車いす利用者とボランティアと一緒に学校へ入ります。「ちびボラ」だけで言えば、私は土・日しか行けないので、年に1～2回行っていました。最初の頃はやる人がいないので、結構、何回か行っていました。現在は結構、視覚障害者協会のメンバーが4～5人行っているのかなあ？ 私は今、大人向けも含めて年に2、3回行くか行かないかです。



小学校で「ちびボラ」を行う後石原さん

(写真提供・羽咋市社会福祉協議会)

桶屋（宮田）：小学校などへ行ってもどのようなことを主に話していますか？

後石原：どのようなことを話しているかと言ったら、「やっぱり、目が見えなくてもみんなと一緒になのだよ。ただ目が見えないだけなのだよ。地域で住んでいる人のなかに目が見えない人もいるのだよ」とか、目が見えなくても、同じ羽咋に住んでいて生活しているのだよ。ということと目が見えないということは、「いろいろな障害がある」という障害に対する理解の話。また子供たちに杖を持った人が迷子になっていることに気がいたら、「ちょっと声かけて」というお願いなど。

後は基本的に視覚障害を持つということは読み書きと移動ができないということ。一般的にはね。「読むこと、書くこと、移動が困難」なことが障害なのだから、点字を使って勉強しているのだよとか、いろいろな情報ももらっているのだよ、ということを知ってもらっています。

お話しの後、体験や交流をします。子供たちに簡単な移動介助の講習会をし「視覚障害者のガイドはこのようにしてね。」とか、点字の読み書きを少しボランティアさんに指導してもらっています。

「ちびボラ」は、障害を持った人だけがお話に行くのではなく、ボランティアさんが一緒に行き、私は見えないので、代わりに読み書きをしたり、移動介助をしてくれます。それを見た子どもたちに、障害を持った人にはどのようなサポート、ボランティアが必要かということを知ってもらうためです。

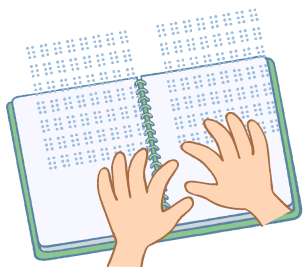
もちろん、ボランティアさんにも理解してもらいます。点字やガイド体験はボランティアさんの協力が欠かせません。このように障害当事者が主体でボランティア、学校の三者が話し合いながら、子どもたちのために「ちびボラ」を作り上げてきました。他の障害の「ちびボラ」も基本は同じです。

少し、視覚に障害を持った人たちを支援しているサークルについてお話ししますね。平成7年当時、玉田さんが「ボランティアセンター」の副委員長をしていました。そこで出会って玉田さんが最初に「点訳ボランティア」をやってくれたのですよ。

玉田さんは羽咋市で「点訳ボランティア」のサークルを作ったのです。『点訳ボランティア「点灯虫」』という名前をつけたのは玉田さんですね。

「ボランティアセンター」ができた後、情

報センターの点字通信教育を受けて1年間ぐ
らい勉強していました。サークルとして成り
立ったのは、平成8年ぐらいだと思いますよ。
音訳ボランティアというのは、元羽咋市社会
福祉協議会・ボランティアコーディネーター
・丸田さんが平成元年ぐらいから立ち上げた
のです。



桶屋（宮田）：子供たちの反応はどうです
か？

後石原：反応はね。東山君も言うけれど、始
めた平成7年当時は子供たちにいやな顔をさ
れました。おかしい目をし、つむっているの
で、みんな慣れないから、何か避けていまし
た。

ボランティアさんも言っていたけれど、敬
遠して偏見を持っていた。だけど、3～4年
目になってくると慣れてきてしまっという
感じです。今はもう、学校へ行っても偏見は
持たれません。小さい4年生でも。4年生と
言えば保育所や幼稚園の時に「ニコニコ保育
（羽咋市社会福祉協議会の福祉教育幼児の部
で、障害を持った人とボランティアが、共生
をテーマにした寸劇を保育所や幼稚園へ行っ
て演じ、その後交流などを行っている）」を受
けています。

10人ぐらいグループでろうあ者の人とか、
車いすの人とか、ボランティアさんたちがみ
んなで行って、保育所などで毎年行っている
のです。

だから、羽咋の子どもたちにすれば、地域
で住んでいる人以外は、保育所か幼稚園で障

害を持っている方と一番最初に出会うことにな
ります。小学校に入ったら「ちびボラ」で
また出会うのです。

今年も「福祉まつり」の視覚障害者ガイド
ヘルパー講習会に出ても、玉田さんも一緒に
やってくれたのですが、本当に点字も知って
いるしあまり抵抗感がないのです。

だから、すごいことだよ。

今年の「福祉まつり」に全部で17人ぐらい
の羽咋市の高校生、高松にある看護大学生と
かが関わってくれました。その間、全然抵抗
がなく関わり方が上手かったです。それはや
はり、「ちびボラ」とか「ニコニコ保育」、
高校生になるといろいろなことで関わって
くるから、障害者に対する偏見というのはなく
なっている。僕は見えないからわからない
けれど、見た目にも「昔から見ると全然、
反応が良い。」とか。

だから、東山君や視覚障害者の藤岡さんな
どは「他の町へ行くと昔と同じような違和感
を持つことがある」と言っている。子供たち
が偏見を持って見ているように感じるこ
とがある。羽咋はこんなことはないね。

桶屋（宮田）：そういう話をする中で、気を
つけていることはありますか？

後石原：私も素人だし、対象者が小学生でし
ょう。小学生でも学年によって違うでしょう。
だから、おのずから話題が違ってくるのは当
然ですが、プロではないからそういうことで
気をつかいます。学年によって「どのような
話」をすればいいのかな……。

仮の話、6年生に話をするのも、小学校1
年生、2年生に話をするのも一緒ではおか
しいからね。対象者が違うから……。もう4
年生、5年生になると点字を覚えてくれたり、

ガイドをしてくれたりします。小学校低学年はボランティアのことを遊びの中で覚えるとか、寸劇のようなことをしています。

だから、対象者によって、学年によって、いろいろメニューが違ってきていることを聞いたことがあります。

桶屋（宮田）：そんな中で失敗談とかがありますか？

後石原：失敗談と言ったら、学校によっては一学年が10人単位の教室もあれば、羽咋小学校のように全体で100人ぐらいの前で話をすることもあるし、そういうことで10人で話をするのも、150人を対象に話すのも、同じような話を持って行ってガイド体験をして失敗したりとか。

そういう同じメニューを持って行っても、ニーズが違ったりするから。プロではないから、自分たちの失敗がたくさんあるのではないかな。

あとはやはり、ボランティアさんも打ち合

わせの時間がなかなかなくて、行き違いがあったりします。だから、ボランティアさんを集めるのも大変です。ガイド体験をするのだったらボランティアさんが7～8人いないとできないです。

だから、ボランティアさんの段取りで違ってきます。そういうことを言えば。

～次号へ続く～

次号は「障害者自立支援法」のお話を掲載します。



大人の方にも語ります

(写真提供・羽咋市社会福祉協議会)

みんなの広場

「武元七尾市長と語るⅡ」を読んで

山本 光男

はじめに

「季刊わたぼうし」の「武元七尾市長との懇談会Ⅱ」で、武元文平市長を始め、羽土泰和健康福祉部次長、佐々波和紀男都市整備課長補佐や石川利樹健康福祉部主幹、本田雄志ワークショップ「野の花」施設長。青山彩光苑からは西村正悦企画広報課長と、利用者側

から川崎節子さんと桶屋善一さんが出席、それぞれの立場から意見を述べていた。

「駅前整備と障害者住宅、及び交通事情」

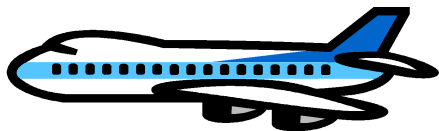
ミナ・クルのことは、前にも述べたので省略する。駅前バス停は、冬期の積雪と雨風の対策が十分ではない。特に車いすの障害者には不自由であり、七尾市当局にはできるだけことはやって頂きたい。市営万行住宅のことを知ったのは初めてだ。障害者用の部屋は、もう満室で空き部屋がないというのは、市の障害者用住宅対策が遅れているということだ。万行町は遺跡の発掘で知られるが、バスなどの交通事情はどうなのか？…、障害者にとっ

ては大きな関心事であろう。彩光苑から直津への道路の完成は何時になるのか?、国や地方自治体の財政事情は厳しく直ぐには行かないが、早く完成して頂きたいものである。

七尾で一番安い運賃と知ってから、何時も「みなとタクシー」を利用していた。これだけ安いタクシー会社は県内にない。今年も何回か入れ歯治療に、七尾へ行った時も「みなとタクシー」を利用したが、恵寿歯科医院から駅前まで450円だった。他の福祉タクシーは近道を言っても、わざわざ回り道をする運ちゃんもいるから、気をつけた方がよい。

七尾バスには「ぐるっと7」があり、彩光苑事務所前までバスが来るので大変便利だ。障害者週間で署名活動をしていたので、僕も署名した記憶がある。七尾市と事情が違い、穴水ライフは奥能登の人口激減で、バス増便の署名運動をしたくてもできないのが現実だ。

穴水の此の木まで買い物に行くのに午前8時21分のバスに乗るが、乗客が僕1名のこともよくあり、多くて7~8名もおればよい方である。当苑へ帰るのは午前11時50分頃になるが、鳩が丘病院へ面会の人たちや、輪島の方へ行く人たちとで、多くても乗客が9名位である。穴水駅発の帰りの最終バスは、午後5時50分の「これのみ能登空港経由」しかなく、11月になれば薄暗く不便だ。タクシーは駅から当苑まで割引きで1,800円、此の木から1,350円で、バス料金とは比較にならない。



「能登中央バス」について

此の木から帰りのバスに乗り損ねたことが二度あるが、パチンコ店前のバス停は特急バス停だけど、能登空港経由のバスも停車し

乗せてくれていた。本来の能登空港経由のバス停は、J A給油所の穴水寄りの田圃の所だ。そうとは知らず、「能登中央バス」へ手紙を出した所、パチンコ店前の特急バス停にも停車するようになった。「精育園前」で穴水行きのバスが来たので、手を上げたのに素通りされ、後日手紙を出した所、「能登中央バス」の役員が僕の居室までお詫びに来られて、「運転手に厳重注意した」とのことである。抗議という程の気持ちではなかったが、手紙を出すことでよい結果をもたらした意味は大きいと思う。



「社会保障と財政事情」

少子高齢化社会の「社会保障」に必要な財源をどうするかは、重要な政治課題となっている。その財源として自民党では、消費税の税率引き上げは避けられないといっている。ガソリンの値上げに続く、食用油・小麦とパンや麺類と菓子、ティッシュペーパーとトイレットペーパーの値上げがあり、一般家庭の台所を直撃する値上げラッシュは、消費を冷やし景気の足を引っ張る恐れがある。何時までも「いざなぎ景気」が続くとは思えない。しかも、わが国の財政事情は経済先進諸国の中では、最悪の状況との新聞記事である。

11月21日の北国新聞の社説に、「消費税率引き上げは消費者心理を冷やし、景気の足を引っ張る懸念がある」と警鐘を鳴らしている。

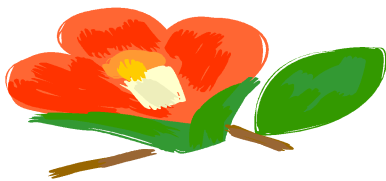
社会保障財源として、消費税率引き上げは安易に過ぎよう。税金の無駄遣いを徹底的に洗い直すことで、かなりの財源ができるのではないか。その気にならなければ、やれることもやれなくなる。要は政府が、その気にな

ることが肝要である。また高齢者の医療費の負担増しと、障害者自立支援制度については3年ごとに制度を見直す条項がある。我々障害者にとっては制度の見直しによる、自己負担金の軽減こそ大きな関心事である。しかし、現在の財政事情を考える時、自己負担金の軽減の実現どころか障害基礎年金目減りの懸念がある。

「衆参両院のねじれ国会」

今年の参議院選挙で自公連立与党が、厚生労働相の「女は産む機械」発言や、防衛相の長崎原爆投下を「しょうがない」と失言。また相次ぐ政治資金問題で惨敗を喫し、民主党が参議院第一党となった。連立与党の過半数割れにより、参議院で連立与党だけでは法案が成立できないのが現実である。いわゆる衆参両院の「ねじれ国会」で、高齢者医療費や障害者自立支援制度の見直しの審議は、何時になったら実現するか見通しすら立たない状況である。

～次号へ続く～



「福祉日記7」・『区分判定』について

悪徳福祉評論家

これから僕たち障害者が施設で生活をし続けるには、区分判定を受けなければならなくなった。これは施設で生活をし続けるためだけでなく、地域で生活するために僕たちはどうしてもヘルパーさんの助けが必要となる。だから、区分判定の結果次第でヘルパーさんか

らのサービスが制限されてしまう。これっておかしいことではないだろうか？

国は僕たち障害者を施設から出して、地域で生活させようとしているのに、判定によってサービスを制限させるなんて、どうみても「あやふや」で、言っていることとやっていることと違うと思う。確かに僕たち障害者は、人の手を借りることはあまり望んではいないが、現実には人の手を借りなければ、生活できないのが事実である。それなのに国は、施設から出て地域での暮らしを求める割にはヘルパーのサービスを制限させている。

あくまで僕は、施設から出て、地域で生活させようとしている国の考え方は、とても良いことだと思っている。今や、施設でのサービスはずさん화になっているから、これからの障害者は家族がいる者は家族と一緒に暮らし、また家族のいない障害者はヘルパーの手を借りながらも地域で暮らすことが最も良いことではないだろうか？……僕ら障害者も地域で暮らす権利はあるのだから、今まで自立が困難な障害者は施設での入所という考えはもう古いのではないだろうか？……

それに先ほどの文書で「施設はずさんなサービスになっている」と書いたが、施設の中には「ずさんなサービス提供」をしている所もある。例えば、ろくにサービスを提供していないのに、あたかもサービスをしたかのように市に申請したりとか、勘がするどい障害者は一目でわかるけれど、知的の障害者は不正をされてもわからないのが現状で、国もこの点のこともしっかり管理しておいた方がいいと思う。あくまでこれは個人でやっている所が多いのだが。まっ、制度も変わってしまった今、こうでもしなくては経営が成り立っていけなくなるからだと思う。

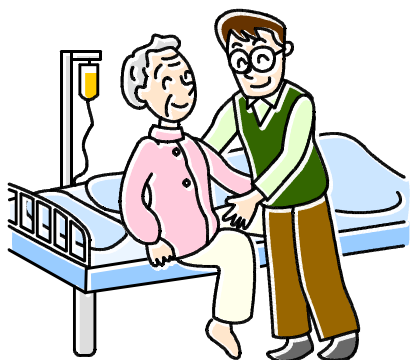
話がそれてしまったが、区分判定だが、こ

れから障害者が地域で生活させるようにと考えているのなら、施設で生活しているのと、地域で暮すのと違いがあることを解って欲しい。どんなに施設でできることでも地域では出来ないことは沢山あるのだから、役所の人はそれを頭において、区分判定をして欲しいものだ。実際に施設によっては、2年後の区分判定をおそれて、入居者に「自分でできることでも、できないと云え」という嘘をつかす所もある。

そうしなければ、僕ら障害者は施設を出なくてはならないし、そうすると施設側も経営ができなくなり困るからだ。だから、役所の人もその事も頭において僕らのことを考えて、判定に望んでもらいたい。

ここで思ってしまうのが、どうして区分判定をするのは、理学療法士や医師ではないのだろうか？……どうして、いつも「デスクワーク」しかない役所の人間が、しかも僕らのことを知らない人が、区分判定をしているのだろうか？

国はこの点もよく検討しておいた方がいいと思う。僕らをみているのは、医師や理学療法士であることを、制度を考えた議員さんたちは認識して欲しい。また僕ら障害者が地域で暮す為には、ヘルパーの手を借りなければならいので、ヘルパーの増加をしておいた方がいいと思う。



シリーズ「ぜんちゃんの自立生活体験」レポート

桶屋 善一

一昨年10月13日～23日の11日間、「自立生活支援センター富山(CIL富山)」においての自立生活体験レポートを数回に分けて掲載させていただきます。



レポート5

18日(水)はデイサービスへの見学に行きました。今日は、Hさんの電動車いすの後について行って、デイサービス事業所まで行きました。そこで私が地域生活を行ったときの入浴サービスを受けるためのことを確認しました。どうしても、地域生活を行っていく上で一番危険を伴い、介助者の負担になるのは入浴です。こんなとき、入浴はデイサービスを使っていきたいと思っていたからです。

今回、訪問したところは、子供から障害者、お年寄りまでを対象にした「富山型デイサービス」でした。私が訪問したときも、たくさんの方が利用されていました。私もこのような形で地域生活を送りたいと強く思いました。これなら自分も安心してやっていけると思っています。

さて、この事業所の見学を終えようとしたとき、車いすのタイヤの空気が抜けたので、空気を入れてもらったが、すぐに抜けてしまいました。どうしたのだろう？…と思いつつ、「むしが傷んでいる」とわかったが、近くに自転車屋さんがいないので「センターに一度帰ろう。」ということになりました。最近は自転車屋さんも減ってきているということです。これも少子化の影響なのかな？……と思いました。

センターのスタッフの方が迎えに来るのに、

わかりやすい場所まで空気が抜けたまま移動しました。車いすが故障しないかと心配しながら3人で移動しました。センターの車に乗りセンターまで帰ってくることができました。

それから電話帳を調べて自転車屋さんを探したが、なかなか見つからずやっと見つけて修理をしてもらいました。修理をしたら車いすが軽くなったようです。今まで空気を入れてもらってもすぐに抜けていたりしていたので不思議でなりませんでした。しかし、今回は修理をしてもらってとても軽くなったようです。

AさんやHさんに「地域生活をしたら、こんなハプニングはしょっちゅう起こるもんだよ。」と言われました。

(CIL富山・機関紙「遊ぼうよ」No. 45より転載)



レポート6

翌日は、午前中はピアカン（ピア・カウンセリング）、午後から富山市内に新しく走ったポートルムに乗ってみました。ポートルムは4月から走っている新しい交通システムです。私は始発から終点まで乗ってみました。車いすの乗車がスムーズにでき、車いす専用席が1席ありました。このポートルムは全国的にも大変有名なようです。私は何の目的もなく、一度ポートルムに乗ってみたかっただけなので、往復乗って富山駅で降りてセンターに帰ることにしました。

ポートルムを降りて地下道をくぐり、センターに帰ろうとしましたが、またまた道に迷ってしまったのです。そこで、市の図書館に入り道を聞きましたが、職員の方もわからず

インターネットで調べてもらいました。それからセンターに電話をし、道を教えてもらいました。結局は全日空ホテルがある道沿いまで案内してもらったら、センターに向かう道がわかりました。

この道は、前回の体験のときに、センターのわずか目の前のコンビニへ、お茶を買いに行くのに間違えて、城址公園まで来てしまった曰く付きの道でした。その時はすぐ近くだからと思い、携帯電話をセンターに置いて来てしまったのです。城址公園のところで通りすがりの富山へ旅行に来ていた人に公衆電話からセンターにかけてもらい、全日空ホテルまで迎えに来てもらったことがありました。

全日空ホテルを出た道路をまっすぐ行けば、センターに着くことを知り、夕方になり薄暗い道を電動車いすで行きました。センターに着くともう5時近くになっていました。実は、帰る途中でトイレがしたくなり、通り道にデイサービスセンターがあったので入れてもらいました。こんなときに地域にあるこのようなデイサービスセンターは本当に役立つと思いました。外に出て困ったときに助けを求めることができ便利だと思いました。

(CIL富山・機関紙「遊ぼうよ」No. 46より転載)

～次号へ続く～



富山市の新交通システム「ポートルム」



真 っ 白 な 雪

さいこうえんの障害者生活支援センター(JR七尾駅前)

利用者・出雲 裕治

この雨が土砂降りのように僕の心に降り続く

この雨が、やがて雪になって心に降り積もる

木枯らしが白い世界を連れて やってくる

いつしか辺り一面、雪景色

眩(まばゆ)いくらいに銀色の世界

あの丘から見える冬景色が僕の心に

よみがえる

この世界が僕に教えてくれる

心の中を真っ白にしたら

きっと見えてくるよって

悩み続けていた僕に語りかけるように

真っ白な雪が僕の心に降り続いていた

制 作 過 程 の 紹 介

何も考えていない時に、フッと言葉が浮かんできます。

これまでは、頭に浮かべるだけでしたが、パソコンを習うようになってから、パソコンに書きとめるようになりました。今年の7月以来、26個の詩がたまりました。詩を作る時は、言葉一つ一つをかみしめながら、文脈がきれいになるように心がけています。自分の気持ちを詩で表せる所が好きです。

これからも、詩を発表できる場があれば発表していきたいですし、将来は詩集を出したいとも考えています。



発想が煮詰まると気分
転換に散歩をします。



「ミナ・クル」の改修工事「七尾市長との懇談会」その後

青山彩光苑ライフサポートセンター

桶屋 善一

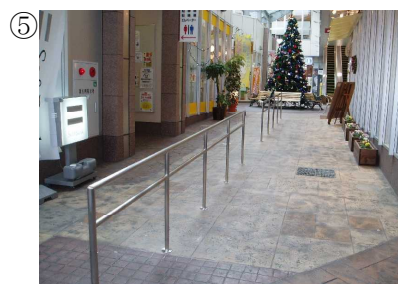
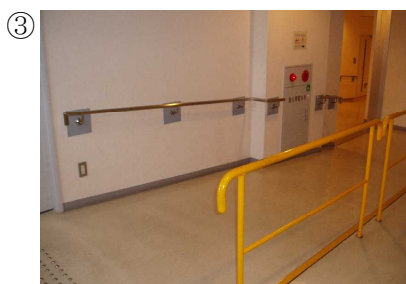
「H S K 季刊わたぼうし」73号の「武元七尾市長との懇談会 I」で、掲載しました七尾駅前第二再開発ビル「ミナ・クル」の改修工事が、昨年12月5日より行われましたので、ご報告いたします。

まずトイレを見てみました。①トイレットペーパーの位置を下げ、各種スイッチの操作盤の位置も下げました。②多目的ベットの位

置も10～30cmほど奥にずらしましたが、私の場合まだトイレットペーパーには届きにくく、1・2階のトイレの面積は少し狭いので、私のような電動車いすでは介助者なしでは利用ができないと感じています。

2階から3階に通じる③④「勾配のきついスロープ」には、写真のような手すりが両側に付けられ、更に1階の⑤「床がガタガタで勾配がある通路」には、中央に手すりが設置されて安全対策が図られました。まだまだ充分とは言えないかも知れませんが、少しは

「市民が安心して利用できるミナ・クル」になったのではないかと思います。



市民が声を上げてから実際の改修まで1年半という月日が経ち、以前なら結論がなかなか出ないと諦めていたかもしれない事例ですが、今回は七尾市の福祉課をはじめたくさんの人達のご協力とご理解のお陰でこのような結果が出ました。

「ミナ・クル」建設前や建設後も意見の食い違いや誤解等いろいろありましたが、結果的

には管理者側の皆様がバリアフリーや危険防止に理解をもって改修工事をして頂いたことに感激し、改修推進に携わって下さった関係各位に感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。今後も勇気を持って自分たちが出来る社会参加を続けて行きたいと思いますので、ご指導ご鞭撻の程よろしくをお願いいたします。



「H S K 季刊わたぼうし」のホームページ
<http://www3.nsknet.or.jp/~petero/>



= 読者企画・食べ物談話 =

故川島四郎先生とサトウサンペイの

「食べ物さん、ありがとう」 (4)

(先生＝川島四郎・生徒＝サトウサンペイ)

管理栄養士・秋本 信子

もう21年前に91歳で亡くなられた栄養学者の川島先生は、食べて美味しい食べ物の害をこのように言っていました。

「食べ物に味をつけて食べるのは人間だけ、ということです。味をつけるからうまくなる、うまくなるから、つい食べすぎる。その結果、血圧が高くなったり、太りすぎたり、血液の中にコレステロールとか中性脂肪がたまったりするのです。今、多くの人が悩まされている成人病（生活習慣病）の原因をたどれば、食べすぎにいきつきます。なぜ食べすぎるかといえば、味をつけて、何とかして、食べ物をうまくしようとするからです」。

20年を経過した現代でも、なんら改善はされていませんね。いかに西洋を真似た食生活が日本人に向いていなかったか、という証明でもあるのですが、残念ながら、日本人にあった食生活のあり方という視点での見直しは今もされていません。日本人はますます『物と食』の快楽に浸りきっているのが現実なのです。

川島先生の考え方は、常に人間としての原点に返ることでした。大事なことは、人間の身体の本質を知ることだと教えたのです。つまり、「第一は、人間のはらわた（内臓）は、北京原人とか、ネアンデルタール人とか、人類が出現した頃とちっとも変わっていないということ。第二は、生命は海から発生したということ。第三は、地球上に誕生したばかりの人類は長いあいだ、森で生活していたとい

うことです」。そこから、「海でとれるものと、森でとれるものが大切」であるとしたのです。

それから、日本人が西洋の人々と同じように肉を食べると病気になるのは、大地の質が違うからで、日本の大地はカルシウムが少なく、水も飲んで美味しい軟水（カルシウムや、マグネシウムなどほとんど含まない）なのに対して、西欧の大地は海の底がせり上がってできたため大地にカルシウムが豊富に含まれ、水も硬水（カルシウムやマグネシウムが比較的多い）で、肉に含まれるリンやイオウ・窒素などの害をカルシウムが自然に防いでいるからです。「これを忘れて、欧米人の真似をしていると、体をこわしてしまいます」と警告していました。

海に囲まれ、森が豊富で、稲作3千年の歴史を持つ日本。日本人の原点に返ることが健康な身体をとりもどす近道であると川島先生は教えたのです。

「石川県立田鶴浜高校」へ「HSK季刊わたぼうし」を届ける

11月14日(水)に「石川県立田鶴浜高校」の生徒達が七尾市内の「ふらっとマップ」を作成したことや、「マップに関するアンケート」に協力していただいた回答を載せた「HSK季刊わたぼうし」No. 74・75を届けて来ました。

校長室で4人の女子生徒、校長先生、担任の先生方と和やかに対談をし、ご協力していただいたことのお礼を伝えてきました。



マイ・ブックスルーム

夜 回 り 先 生

水谷 修著 本体：¥1,470+税

発行・発売：サンクチュアリ出版

不登校、いじめ、大人たちに傷つけられて、リストカットで自分を傷つける、そして薬物や売買春が横行する「夜の世界」に誘い込まれていく子供たちと向き合った愛の記録。そして、自信を取り戻していく子供たちの息遣いの紹介の感動だ。なぜ、夜の街の子どもたちが、水谷さんに「心を開く」のか、この中に書かれている。「子供は、受けた優しさや愛が多ければ多いほど、非行や犯罪から遠ざかっていきます。」「褒めるたびに子供たちの目は輝く。あんなに美しいものはこの世の中にはない。褒められることで明日に生きる力を持つ。」わかっているつもりであったが、わかってなかったのだと痛感し涙なしには読めない。現代は決して経済優先の世界とはいえないが、世代を超えて何かが失われつつあることは誰しもが否めない思いの中で、この書には回答があり、生きた証があり、何よりも読むものに新たな行動を起こさせる。この書はシリーズがあり、漫画としてもあり伝わってくる迫力は変わらない。(H.N)

年間協力会員募集中

この機関紙は障害のある人、ない人がそれぞれの考えを出し合う中から、互いに理解を深め、共に生きる豊かな社会づくりを目的として、有志により発行しています。

つきましては、主旨に賛同して協力会員になっていただく方々を募集しています。

この会費で、在宅障害者や福祉関係機関等に送付していますので、機関紙一部の料金ではなく、年間協力会費として扱っています。

年間協力会費：2,000円

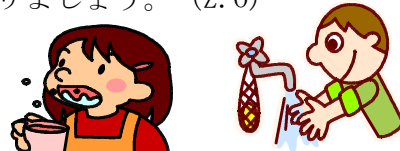
会費振込先：郵便振替口座

振込先名義：わたぼうし連絡会

00750-6-9791

編集後記

新しい年を迎え、いかがお過ごしでしょうか？……昨年の暮れから「ノロウイルス」に似た症状の患者が県内各地で発生していると報道されています。昔はなかった新しい病気が発生していることが怖いですね。外から帰ったら「手洗い・うがい」をして、自分の体は自分で守りましょう。(Z.O)



川柳裏表紙

車椅子 押す手は若き ボランティア

26年前の昭和56年の国際障害者年に「羽咋わたぼうしコンサート」が開催され、その実行委員会のメンバーは、みんな若いボランティアの方々と、会場作りや手話コーラスが行われ大きな感動に包まれた。その輪は年を変えて松任、和倉と引き継がれ、その実行委員会の有志が集まってできたのが、この「わたぼうし連絡会」で当時いろいろと活動していたが、会員の減少により今ではこの「季刊わたぼうし」の発刊だけとなってしまった。いろいろの思い出が残っていて、なつかしいですネ。(比)

編集及び連絡先

連絡先：zen@san9.net

定価二〇〇円